最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか8

登場人物紹介

ジュリアス

パリスタン王国の第一王子。優秀だが、スカーレットをからかって遊ぶのが大好きな腹黒い性格。

テレネッツァ

スカーレットの婚約者だった第二王子カイルをそそのかし、婚約破棄させた張本人。

スカーレット

冷たくも美しい容姿から『氷の薔薇』と称されるヴァンディミオン公爵家の令嬢。第二王子との婚約破棄をきっかけに悪徳貴族たちを拳で成敗した。

太陽神オル・ソレイユ

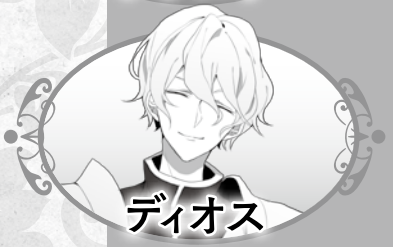
三大神の一柱。盤上遊戯の支配者。


カイル


レオナルド


シグルド


ナナカ


ディオス


サーニャ


アルフレイム


ゴドウィン


ダンテロード


ヘカーテ

第一章　そのお方にはもう、私という先約がおりますので

目を閉じた視界を、ほのかに白みがかった闇が覆う中。
微睡(まどろ)みに抗うように、私――スカーレットはゆっくりと瞼を開きます。そこに広がっていたのは霧がかった、見渡す限り白一色の世界でした。
「……初めてここを訪れた時は現実離れした光景に驚き、若干の心もとなさすら感じたものですが」
周囲には大小様々な大きさの柱時計や置時計。懐中時計や砂時計が地面に散乱し、あるいは宙へと漂っていました。忘れ去られた時の墓場――その光景を見る度に、そんな言葉が頭に浮かびます。
壊れているのか、それとも動かすつもりがないのか。時計はどれも眠りに落ちているかのように針を止めていて、ここが私達の生きる世界の時の流れとは、別の次元にあることを表しているかのようでした。
「時空神クロノワ様の世界――今となっては最早親近感……いえ、自分の領域のように感じますわね」
始祖竜(しそりゅう)ロキを倒すために神々を否定し、魔族の力に頼ったことで一度は剥奪(はくだつ)された私の時空神の

加護。
しかし、魔大陸の決戦で勇者達を倒すため、ジュリアス様の創造の加護によって、再びこの身に宿ったその力は、以前とは比べ物にならない程に進化していました。
以前は苦戦を免れなかった、太陽神という強大な神の恩寵により、人の身を超越して無限に成長する勇者達が、まるで相手にならない程に。
私の身に宿ったその力から感じたのは、まさに望むすべてが実現するかのような全能感でした。
そんな時を自在に操る神にも等しい力を得た今の私にとって、その力の源となっているこの時空神の領域を心地良く感じるのは、ある意味当然といえるかもしれませんわね。
と、そんなことを考えておりますと――
「――やれやれ。まさか人の身でありながら、地上とは隔絶された時の狭間にあるこの領域に、自ら足を踏み入れてくる子がいるとはね」
穏やかながらも神性を感じさせる中性的な声が、私の前方から響いてきました。
霧の奥から聞こえてくるその方の声音には、呆れ交じりの苦笑が感じ取れます。
「久しぶりだね、愛し子よ。まさか加護を返してもらった君と、今生で再び邂逅することになるとは思っていなかったよ」
あらあらまあまあ、心外な反応をなさるものですわね？
こちらからしてみれば一方的に別れを告げられて？
できれば共にありたかったなどという捨て台詞を残されて？

勝手に部屋に閉じこもられれば、ドアをブチ破ってでもお会いしたくもなりますわよ。
「ごきげんよう、クロノワ様。いつも誘われるだけというのも失礼かと思い、今回はこちらから足を運ばせていただきましたわ」
スカートの裾をつまみ、笑顔で会釈をします。すると前方の霧が晴れていき、そこから黄金の椅子に座した中性的な美貌の殿方が姿を現しました。
空気に溶けるように透き通った長い金髪をなびかせ、全身を覆う純白の薄布を纏ったそのお方こそ、天上から世界を統べる三大神の一柱――時空神クロノワ様です。
「相も変わらずとんでもないことをする子だ。神である私ですら、君の行動にはいつも驚かされるばかりだよ」
そうは言いながらもまるで驚いた素振りもなく、余裕の微笑を浮かべるクロノワ様。
ええ、そうでしょうとも。だって神々の頂点の一角である貴方には、地上で起こっていたことなんて、すべてお見通しでしょうから。
「あまり悠長にしている暇もありませんので、単刀直入に言わせて頂きます」
目前に立つ神に祈るかのように両手を組み、頭を深く下げます。
「クロノワ様――どうか貴方のお力を私にお貸し下さいませ」
「ふむ」
思案するように小首を傾げた後、クロノワ様が口を開きました。
「君達がわざわざ魔大陸にまで渡った理由は確か、失った私の加護を復活させるためだったね」

「ええ。クロノワ様の加護は私が思い切りクズをブン殴――いえ、国を守るために不可欠なものでしたから」

魔物から国を守るために、パリスタン王国に張られている結界。

その結界を維持するために必要だった私の加護を取り戻すため、私達は魔王ダンテロード様に会いに、リンドブルグの武装船団に乗り込んで魔大陸に渡りました。

「結果として君は時空神の加護を取り戻した。見事、目的を果たしたわけだ。加護を管理する私の意志に反してね」

皮肉めいた言葉を付け加えつつ、クロノワ様は薄く目を開いて私に問います。

「その上でさらに君は一体、私に何を望むというんだい？」

微笑をたたえたその表情は穏やかなままで、このお方がどんな感情を抱いているのかはまったく推し量れませんでした。

神である貴方に何を望むのか？　そのようなこと、地上の様子をすべて知り得るクロノワ様には、言わずとも分かっておいででしょうに。

「加護の代償によって地上から存在を消されたジュリアス様を助けるため、力をお貸し頂きたいのです」

この世界に存在していないものをゼロから創り出す〝創造〟の力――三大神の一柱にして、その頂点にある創造神オリジンの権能。

そんな物を人の身で行使すればどんな代償があるかなど、誰よりも聡明なジュリアス様に分から



ないはずがなかったでしょう。
　追い詰められた絶体絶命の状況でそれ以外に方法がなかったとはいえ、皆様を……私を救うために自らを犠牲にされたあのお方を、私は絶対に救い出さなければなりません。
「〝赤の書〟にはこう記されていました」
　赤の書――創造神オリジンによって作られた、世界で最も古い神器。ダンテさんより受け取ったその本には、この世界が創造された時から今に至るまでのすべての事象が書かれていました。
　その本によれば――
「人の身には過ぎた創造の権能を行使した代償により、この世界から存在を消された者の精神は、無限に広がる創造神の世界に放逐され、永劫の時をさまようと」
　そして時の経過と共に精神は自己を保てなくなり消滅し、今は消えたように見えただけの肉体も、それと同時に死に至るとも。そうなってはジュリアス様を助けることは不可能です。
「今の私は神の権能、それも三大神クロノワ様に限りなく近い力を身に宿す存在……本来は招かれなければ来ることができない神の領域にも、こうして精神だけを飛ばすことで自ら到達することができました。ですが――」
「創造神の世界には人の身では決してたどり着けないからね。いくら力が神々に近づこうとも、魂の格は生まれ落ちた時に定められているのだから」
　そう言ってクロノワ様がいつの間にか手に持っていたハープをポロン、と爪弾きます。
「確かに君の考えは正しい。三大神である私の力があれば、君を精神体となっているジュリアスの

元に送り届けることは可能だろう。でもね――」
　細く長く美しいクロノワ様の指が、悲しげな旋律を奏で始めます。
　まるでクロノワ様の心情を代弁するかのように。
「君は世界の真実を知ったはずだ。魔王に話を聞き、赤の書を読んだことで。すなわち、この世界で起こるすべての事象は、神々の嗜好（しこう）を満たすための盤上遊戯（ゲーム）でしかないことを」
「……ええ。正直、むかっ腹が立ちましたわ」
　ここ最近、私の周囲で起こった厄介な出来事の大半はクソ女神パルミアを筆頭として、すべて神様がらみでしたし、元より彼らをあまり好意的には思ってはいませんでした。
　ですが、まさか魔大陸の成り立ちから魔族と人間の争いに至るまで、すべてが太陽神の仕組んだゲームに過ぎなかっただなんて。
　それを知った時、私の中で人類の上位者である神に対する崇敬の念は、完全に消えてなくなりました。それどころか、もしブン殴れるなら顔面に一発ブチ込んでやりたいと思った程です。
　私達は貴方達神々の嗜好を満たすためだけに生まれた、操り人形などではありませんわ、と。
「以前、ロキを封印した折に私は君に言ったね。できることならば、君にはこちら側で戦ってほしかったと。それはつまり――」
　目を細めて一呼吸置いてから、クロノワ様が口を開きます。
「太陽神オル・ソレイユのゲームにおいて、あの時点から君達は敵側だということだ。少なくとも、彼のゲームを楽しんでいる一部の神々にとってはね」

もちろん、それは重々承知しておりますわ。神様なんかに頼らない。そう心の中で否定した時に、クロノワ様と私が袂を分かつことは分かっておりましたもの。

「そんな敵側の神々の中でも三大神という首魁に等しい立場にある私が、この期に及んで君達に力を貸すなどと……そんな甘いことを本当に信じているのかい？」

「ええ。信じております」

迷わず即答する私に、クロノワ様はピクリと眉を動かし、ハープを爪弾く手を止めます。

「……どうしてそう思うんだい？」

「だって、クロノワ様は先程私におっしゃったではありませんか――〝愛し子〟と」

愛し子――先程そうおっしゃった時の優しい声音を、私は確かに覚えています。神は私達人間を無償の愛で包んで下さる、などと聖職者のようなことをのたまうつもりは毛頭ありません。

でも、こうも思うのです。

「私、こう見えて人を見る目はありますのよ。だからすぐに分かりました。もしクロノワ様が本当に地上の人々を遊び気分で弄んでいるのなら、駒の一つに過ぎない私に対してあのような穏やかなお顔で、愛しいなどとおっしゃるはずがありません。それに――」

気が遠くなるような遥か昔から見守り続け、時には手を差し伸べて慈しんできた我が子達を、太陽神のお遊びで弄ばれて気分が良い親などいはしないと。

「いくら私がここに足を踏み入れられる力を持っているとはいえ、この領域はクロノワ様のもの。その気になればいつでも追い出すことはできるはずです。いえ、本当に私を敵と見なしているのならば、ここに私が入り込んだ瞬間にそうしていたはず。なのに、そうはしなかった。その時に私は確信に至りました」

それは私の思った通りであってほしいという、ただの願望かもしれません。

いえ、違いますね。その通りでなければ困ります。

ジュリアス様を救い出して、二人で皆様の下に帰るためにも。

「クロノワ様は人々を弄んで楽しんでいるクソ太陽神とは違うと。遥か昔から聖女に加護を与えて、パリスタン王国を見守り続けてくれていたように……まだ愛し子である地上の人々を、魔族を、生きとし生けるすべての方々を。救いたいと思ってくれているのではないかと」

私の言葉にクロノワ様は目を伏せて瞼を閉じます。それから穏やかな声音ながらも、わずかに悔恨を滲ませたような、普段より少しだけ低い声でつぶやきました。

「……買い被りすぎだよ。私はそこまで慈悲深い存在ではないさ。現に一度、君から加護を奪ってオル・ソレイユの計画に協力しているのだから。ただ、そうだね――」

ふっ、と。口元を緩めて、眉尻を下げたそのお顔は。子供にねだられた物を、甘やかして仕方なく買ってしまうような。そんな温かな苦笑に満ちていました。

「君の言う通りだ。私は人々が人同士の営みによる結果ではなく、神の気まぐれで苦しめられる姿を見るのは忍びない。できるのであれば、手を差し伸べてあげたいと思っていた。しかし、一度君の手を離してしまった手前、中々こちらから救ってあげることはできなくてね。だから――」

クロノワ様が再びハープで旋律を奏で始めます。

その音色は慈しみと優しさと、何よりもすべてを包み込むような愛に満ちているように感じました。

「――ありがとう、愛し子よ。私の手を求めてくれて。君が手を取ってくれるのであれば、再び君達人の子らを、我が愛で包もう」

「お礼を言わなければならないのはこちらの方ですわ。ご助力、誠に感謝致します」

深く頭を下げながら、私の口から自然と出た言葉。それは心からの感謝の気持ちでした。

だってクロノワ様からすれば、私に手を貸すメリットなど何一つありませんもの。

恐らくは太陽神や他の神様からも、良い顔はされないでしょうに。それでも私達、生きとし生ける者への愛で力を貸して下さるというのですから。

たとえ私が基本的には大抵の神様をブン殴りたいと思っていたとしても、クロノワ様に関してだけは感謝の気持ち以外に持ちようがありませんわ。

「――ところで」

頭を上げた私は、頬に手を当ててクロノワ様にニッコリと微笑みます。

協力をとりつけたところで、ここぞとばかりに言っておかねばならないことがありましたので。

「ご協力いただけるということは、再び私から加護を取り上げることはないと思って良いのですよね？」

その言葉にクロノワ様が目を丸くします。

そしてフッと口元を緩めて言いました。

「ああ。今のところそのつもりはないよ。助けるといった手前ね」

言質が取れて安心いたしましたわ。

これから決戦という時に、また加護が無くなっては困ってしまいますもの。

「――ただし、そのままというわけにもいかない」

クロノワ様が緩めていた表情を正して、真面目なお顔で口を開きます。

「今の君の力は人が持って良い加護の範疇（はんちゅう）を越えてしまっている。そのまま地上でそれを自由に行使するともなれば、流石にすべての神々が黙ってはいないだろう。故にその力を制限させてもらいたい。程度で言えば以前の君より少し強い程度にね」

「構いませんわ」

即答する私に、クロノワ様は「おや」と不思議そうにつぶやきました。

「私の今の力は神の権能に等しい。それは地上にいるどんな存在よりも強力な力で、その気になれば世界を統べることすら容易でしょう」

神器を持ち、太陽神の加護を最大限に受けた、現在過去に至るまでおそらく大陸史上最強の存在だった勇者ですら、相手にならないくらいでしたから。

「故に力を制限されるであろうことはあらかじめ予想できていましたし、加護自体を取り上げられずに済むのであれば、私としてはそれで十分と考えておりますわ」

私の答えにクロノワ様は、微笑を湛えながら頷きました。

「聞き分けが良い子で助かるよ。これでオリジンにも申し訳が立つというものだ」

「……？　今の話とオリジン様に一体何の関係があるのでしょうか？」
クロノワ様がハープを手放し、おもむろに椅子から立ち上がります。
彼は目前まで歩いて来ると、私の頭上に手をかざしました。
「今君が持っている力は、創造神オリジンの権能、〝創造〟によってゼロから新たに創り出されたものだからね。それはつまり、君がその力を持つことを最高神であるオリジンが了承したことと同義だ。それを私の権限で勝手にいじったりしたら、彼の気分を損ねてしまうだろう？」
クロノワ様の手から光が溢れると、私の身体を満たしていた全能感が消えていきます。これでもう、自在に時を操るなどといった神のごとき力は使えなくなった……ということでしょうね。
でも、名残惜しいなどとは露ほども思いませんわ。
あのような人の身に余る力は、身を亡ぼすだけですもの。
私はただ、ムカつく豚野郎を思い切りブン殴れるだけの力があれば十分ですので。
「事情は理解できました。ですが疑問に思うこともあります。オリジン様は結局……太陽神と私達、どちらの味方なのですか？」
三大神の頂点であり、この世のすべてを創造したといわれる神、創造神オリジン。
存在こそ知られているものの、地上の出来事に一切干渉しないため、イマイチ何を考えていらっしゃるのか分からないのですよね。
「人々や魔族、あるいは神々の間に立ち、世界の調和を保つ天秤（てんびん）の担い手であり、世界の守護者――調停者でしたか。そんな自分の加護を授けた存在を地上に派遣し、後は一切の手出しもしなければ影すらも見せない。今のままならいいのですが、もし肝心なところで太陽神の味方などをされたら……正直困ります」
言葉で聞く限りは中立的に見えますが、言い方を悪くすればどっちに転ぶか分からない不確定要素（イレギュラー）。それもすべての神々を超越した圧倒的な力を持っている方ともなれば、オリジン様の行動次第で今後の情勢――主に私の太陽神をぶっ飛ばす計画に支障をきたしかねません。
なのでここでハッキリさせておく必要があるのです。
オリジン様が一体、どのような行動指針を持っているのか。そして何よりも、この神々が起こしているくだらない盤上遊戯（ゲーム）に参加する気があるのかどうかを。
「ああ、それは無用な心配だよ。彼は自分の創造物が何をしようと不干渉なんだ。それはこの世界が創造されて以来ずっとね」
遥か昔に思いを馳せるような遠い目をしながら、クロノワ様がつぶやきます。
「……たとえ生者と神が争おうとも。彼が自らの意志でどちらかに加担することはない。その結果として、生きとし生けるすべての者が死に絶えて、世界が滅びようともね。彼はただ創造主として、地上で起こるすべての出来事を見守るのみ。それが創造神オリジンの在り方なのさ」
「良くも悪くも傍観者ということですか。でも――」
干渉を是としないならばなぜ、調停者なる存在を地上に遣わせているのでしょう。
滅びの時を延ばして、なるべく長く地上で起こる愉快な出来事を見ていたいから？
だとすれば随分と性格の悪い――まるでジュリアス様のような方ではありませんか。

「……調停者になぜジュリアス様が選ばれたのかが分かったような気がしますわ」
「君の不安を取り除けたようでなによりだよ。さて――」
クロノワ様が自らの懐に手を入れて、そこから見覚えのある黄金の懐中時計を取り出します。
「あら、それは確か……時空神の懐中時計でしたか」
時空神の懐中時計――聖地巡礼の際、テレネッツァさんの手によって奪われたディアナ様の加護を取り戻すため、クロノワ様が授けてくれた魔道具です。
今それを取り出したということは、ジュリアス様を助けるために必要ということでしょうか。
「これから君を創造神の世界で漂うジュリアスの元へ送るわけだけど、彼を救うためにはとある者の力を借りる必要があってね」
クロノワ様が懐中時計を軽くポイッと、下手投げで放ります。
それは私とクロノワ様の眼前、三メートル程の位置に飛んでいくと、白い地面にトプン、と。まるで湖に物を落としたかのように沈んでいきました。
直後、時計が落ちた場所がブクブクと泡立ち、そこから何かが浮き上がってきます。
「まあ。随分と大きな貝ですわね」
それは人をすっぽり収められるくらいの大きさをした、二枚貝でした。姿を現した貝は、ギギギと軋むような音を立てながらゆっくりと蓋を開いていき、その中には――
「――は？」
テレネッツァさんにそっくりの見た目をした、薄桃色の衣を纏った髪の長い女が横たわっていました。彼女を一瞥したクロノワ様は、穏やかな声で語り掛けます。
「さあ起きなさい――女神パルミアよ」
今、聞き捨てならない不快な名前が聞こえたような気がしたのですが。
眉をひそめる私の前で、貝の中にいた女はゆっくりとその身を起こします。女は眠たそうな表情で、瞼を擦りながらつぶやきました。
「……私の眠りを妨げるのはどこの誰ですか？」
正面から見ても……ああ、やはりそっくりです。テレネッツァさんがもう少し歳を重ねて、二十代程に成長したならそのままこの方になるでしょうか。
そういえば以前、魔大陸でテレネッツァさんと行動を共にしていた時に、散々パルミアへの愚痴を聞かされましたが、その中で彼女が言っていましたね。
私はあのクソ女神の一部から身体を作られたから、見た目がそっくりなのだと。
「寝ぼけているのかい？　君を呼んだのは私だよ、パルミア」
クロノワ様が語り掛けると、パルミアは「はぁ？」と眉をひそめます。
「クロノワ？　そんなわけがないでしょう。今まで何千年と私に見向きすらしなかったあの人が、なんで今になって――」
パルミアがクロノワ様の方を見て目を大きく見開きます。
「えっ？　は？　クロ、ノワ……？」
「そうだよ。久しいね、パルミア」

呆然とした顔をした後、パルミアの顔が一気に紅潮します。
「きゃあああ!?　な、なんで!?　どうして!?」
両手で頬を覆って、恥ずかしそうに顔を左右に振るその様は、まるで愛しい人に思いもかけず出会ってしまった、恋する乙女のようでした。
そういえば以前クロノワ様が言っておりましたね。パルミアは私のことを愛しているのだと。
この様子だとそれは本当のことだったようです。
「貴方が私をここに呼び出したの？　それはつまり貴方は私のことを愛しているということで良いのですよね!?　両想いということで良いのですよね――はっ!?」
パルミアが何かに気が付いたかのように、焦った様子で両手で顔を覆います。
「み、見ないで！　今の私は信仰も力を失ってすっかり醜くなってしまったの……せっかく貴方と両想いになれたのに、こんな顔じゃ嫌われて――え？」
自らの顔に触れたパルミアが驚いた表情を浮かべて、自分の身体を見下ろします。
「顔が、身体が元に戻っている……？　これはまさか貴方が……？」
「うん。私の〝時間回帰〟の権能を使って、君の信仰も力も元通りに戻しておいた。十全に力を振るえる状態でなければ意味がないからね」
しれっとそう告げるクロノワ様に、パルミアは感極まった表情で叫びました。
「ああ……ああっ！　クロノワ！　愛しいお方！　愛の女神であるこのパルミアを愛で堕とすなんて、なんという罪深いお方なのでしょう！」

パルミアは目を閉じ口元に微笑みを浮かべると、両腕を広げてクロノワ様に歩み寄ります。
「さあ今すぐ抱きしめてください。貴方の愛で私を。さあ、思い切りぎゅっと――」
何も知らない方が見たら、それは美男美女の感動的な抱擁（ほうよう）の場面に見えるかもしれません。でも私から見ればそれは――
「――思い切りぎゅっですね？」
今からご自由に殴って下さい、と言っているようにしか見えませんわ。
「……は？　オマエ、スカーレット!?　どうしてここに――」
眼前に迫る私の姿に、パルミアがあり得ない物を見たかのような表情で固まります。
そんなクソ女神の顔面に私は躊躇なく、ぎゅっと握りこんだ左拳を、思い切り振り抜きました。
「ぱみっ!?」
ドゴォ！　とおよそ人を叩いたとは思えない重低音を鳴らしながら、パルミアは遥か彼方に吹っ飛んでいきます。
「ふう。スカッとしましたわ」
ずっと心のどこかでしこりになっていたモヤモヤが、今ようやく晴れました。
思えば聖地巡礼の際、テレネッツァさんはブン殴ったものの、裏で彼女を操っていたクソ女神を殴れなかったことがずっと心残りだったのですよね。
このような貴重な機会を作ってくれたことに感謝致しますわ、クロノワ様。
「――っざけるんじゃないわよ!?　何してくれてんですかあ、このクソ人間は!?」

起き上がったパルミアが鬼のような形相でこちらに戻って来ます。
あら、殴り甲斐のありそうな起き上がりこぼしだこと。
「何をしてくれている？　それは私のセリフですわ」
再び拳を握り込んで構えます。何度も殴れるなら殴るに越したことはありませんからね。
「先に手を出されたのも、散々迷惑をかけられたのもこちらの方です。今まで我慢していた分、たっぷりとお返しをして差し上げますわ――クソ女神様」
「はぁん？　思い上がりも甚だしいですね。私の巫女にすら苦戦していたオマエが、その主たるこのパルミアをどうにかできるとお思いですか？」
「できますわね。この空間でならどうやら、神である貴女にも私の攻撃が通用するようですから」
以前目を通した赤の書にはこう書かれていました。
地上でならともかく神の領域内においては、創造物に過ぎない人間には、存在の格が違う相手である神に対して物理的な影響を与えることは不可能であると。
いつかムカつく神をブン殴る時も来るかもしれないと思い、ワクワクしながら調べたのですが、それを確認した時にはとてもガッカリしたのを覚えています。
ですがその記述とは裏腹に、先程は何の問題もなくパルミアを殴れました。
これは私の推測になりますが、ここがクロノワ様の領域であるため本来招かれざる者であるパルミアは全力を発揮できず、逆に私はクロノワ様の加護を受けている存在であるため、実力以上の力を発揮できているということが大きいのでしょう。

ならばやることは決まっております。
「ムカついたのなら神様だってブッ飛ばす――そう、淑女の嗜みですわ」
「ほざきなさい人間風情が！　二度とその生意気な口を叩けないように、私の愛で消し飛ばして差し上げます！」
叫びながら怒りの形相でこちらを睨みつけてくるパルミア。正に一触即発――そんな様子で対峙する私達に、クロノワ様はやれやれと呆れたように言いました。
「本当に人の……いや、神の話を聞かないね君達は。言っただろう？　力を借りる必要があると――スカーレット」
私を窘めるように、クロノワ様は穏やかな表情で口を開きました。
「ジュリアスを救いだすには彼女、愛を司る女神であるパルミアの力が必要不可欠なんだ。だから争うのはおやめ。それと君もだ、パルミア」
クロノワ様がパルミアに向き直ります。
「力を失い千年の眠りについていた君を元の姿に戻してあげたのは、また人々を苦しめさせるためじゃないよ。逆だ。君にはスカーレットを――地上に生きるすべての人々を助けてほしい」
その言葉にパルミアがピクッと眉をひそめました。
「そこのムカつく女はともかくとして……地上に生きるすべての人々をとは一体どういうことです？」
「神である君にはこういえば伝わるだろう？　オル・ソレイユの盤上遊戯（ゲーム）だよ」

パルミアは「ああ」と思い至ったかのように頷くと、呆れたようにつぶやきました。
「あの男……いつかその時が来るとは思っていましたが、ついに勇者と魔王を戦わせるお遊びにも飽きましたか」
そして再び目線をこちらに戻すと、不愉快そうな顔で口を開きます。
「嫌です。いくらクロノワの頼みでもそれだけは聞けません。私を信仰する信徒達だけを救うならともかく――」
フン、と鼻を鳴らしたパルミアが吐き捨てるように言いました。
「私の計画を散々に邪魔した挙句、あろうことか美の女神である私の顔面を殴ったこの女を助けるなんて、絶対にあり得ません！」
「まあ、神様ともあろうお方が。ちょっとお顔を撫でられたくらいで大げさですわね」
「どこの世界で拳が顔面にめり込むことを撫でると言うのですか!?　まったくこれだから野蛮な人間は嫌いなのよ！　このゴリラ！」
人なのかゴリラなのかどちらなのでしょう。
言っていることがめちゃくちゃですわ。まったくこれだからクソ女神は。
「そうそう、パルミア」
ふぅと呆れ混じりのため息と共に私が首を傾げていますと。
不意にクロノワ様が、パルミア様に笑顔で語り掛けました。
「君――ロキをたぶらかしたよね？」

「っ!?　な、なんのことですか!?」
その言葉に、パルミアがきょろきょろと落ち着かない様子で目線を泳がせます。
ロキ……私達がヴァンキッシュで戦った、あの邪竜ロキのことでしょうか。
「元々神々の忠実な僕だったあれに君が余計な知恵をつけさせたせいで、どれだけ当時の神々や人間達が迷惑を被ったか、知らないわけじゃないよね？」
「あ、あれはちょっとした好奇心というか悪戯で……そ、それにそんな何千年も前の事を今更言われても困ります……」
あからさまにバツが悪そうにボソボソと答えるパルミア。
どうやら私達が生まれる遥か昔の話のようですわね。とはいえ、あのロキが悪事に走るようになった原因がこのクソ女神にあったのだとすれば、直接的ではないにしろ結果として私達は迷惑を掛けられているわけですから、やはりブン殴ってしかるべきでしょう。
しかもその理由が好奇心？　悪戯？
ああ、どうにかしてもう一発、隙を見てこのクソピンクを思い切りブン殴れないものかしら。
「眠りについていた君は知る由もないだろうけど、つい最近もロキは地上で力を取り戻して暴れてね。それをそこにいるスカーレットや人間達が退治した後、私が時の牢獄に封印して事なきを得たんだ。これがどういうことか分かるよね？」
「……っ」
目が全く笑っていないクロノワ様に、パルミアは青ざめた顔をしています。

いい気味ですわね。これを機に少しは反省すると良いかと存じます。軽く数千年程。
「もう過ぎたことで済む話ではないよ。君のせいで私や彼女達人間は、とても迷惑をしているんだ。それなのに君は素知らぬふりをするというのかい？　ああ、なんということだろう。このままだと私は君のことを今までにも増して、嫌いになってしまいそうだ。少なくともこの先、数万年後くらいまで」
「そ、それは嫌ですっ！」
慌てたパルミアが今にも泣きそうな表情で、クロノワ様の足元にすがりつきます。
「貴方に声を掛けてもらったのも、姿を見せてくれたのも、もう何千年も前なのですよ……？　また数万年も袖にされるなんて、私には耐えきれません……！」
あのプライドの高そうなパルミアがこんなにもしおらしくなるだなんて。
クロノワ様からパルミアに愛されているとは聞いていましたが、これは相当なものですわね。
「じゃあどうすれば良いか、賢くて愛らしい君ならば分かってくれるよね？」
「……はい。分かりました」
パルミアは立ち上がると、私に向かって渋々というレベルではない心底嫌そうな顔で言いました。
「仕方ありませんね。本当は殺してしまいたいくらいに憎いのだけれど、クロノワたっての頼みです。私の髪の毛の先程のほんの少しだけ、力を貸して差し上げます」
「クロノワ様。このクソ女神、まったく反省をしていませんわ。ぶっ飛ばしてもよろしくて？」
「パルミア？　君は余程私に嫌われたいらしいね」

「ああ、もう！　分かりました！　私の力の及ぶ限り、全力でこの女と人間達に協力します！　これでいいんでしょう!?」
顔を真っ赤にしてヤケクソ気味に叫ぶパルミアに、クロノワ様が「よろしい」と頷きます。
クロノワ様、先程のパルミアを追い詰めた手管といい、優しそうなお顔をしておきながら、やはり中々に良い性格をしていらっしゃいますわね。
「それで!?　私は何をすれば良いのですか!?　言っておきますが、いくら力と信仰が戻ったとはいえパルミア教が潰れて影響力を失った以上、地上で私にできることなどたかが知れていますからね！」
そういえば私も協力させるというのは聞きましたが、具体的にパルミアにどんなことをしてもらうのかまでは教えてもらっていませんでした。創造神の世界に漂っているというジュリアス様の精神を救うために、このクソ女神の力が必要とのことでしたが――
「そうだね。まずパルミア、それにスカーレット。これから君達は二人で一緒に――宇宙に行ってもらおうかな」
「「……はい？」」
視界すべてに広がった、無限とも思える程に続く暗黒の空間。すべてが黒に塗りつぶされたその果てには、数えきれないほどの星々の輝きが燦然（さんぜん）と瞬いているのが見えました。
宇宙――私達が地上から見上げていた夜の星空。

決して人の身では到達することはできない、天頂の遥か彼方に広がっていた漆黒の帳。
そのただ中に、今私はふわふわと。覚束ない有様で浮かんでいました。
「ここが創造神の世界――オリジン様の領域ですか。同じ三大神であるクロノワ様の世界と比べても明らかに異質……いえ、次元が違いますわね」
恐らくはこの世界のどこかに創造神オリジン様はいらっしゃるのでしょう。
そして無限に等しいこの宇宙で、輝く星々すべてを見守っている。その途方もない規模を考えれば、なるほど。極小どころか、海に落ちている砂粒一つよりもさらに小さな世界であるロマンシア大陸に、オリジン様が直接干渉をすることなどありえないと言い切れます。
「それ故に手が回らない自分の代わりに、世界が簡単に滅びないようにオリジンの加護を与えた調停者を遣わせた――そんなところでしょうか？」
頭上に向かって声をかけると、浮かんでいた桃髪の女――パルミアがフンと私から顔を背けます。
その表情は不機嫌そのもの。クロノワ様が作った扉を通って、この宇宙に来た時から一時間ほどが経ちますが、もうずっとこんな調子でした。
「いつまで不貞腐れている気ですか？　私としても貴女のような方と仲良くする気はサラサラありませんが、協力すると約束した以上、それ相応の働きをしてもらわなくては困ります。というかクロノワ様に嫌われて困るのはパルミア、貴女の方では？」
「――うるさいですね！　だから今やっているでしょうが！」
目を見開いてパルミアがヒステリックに叫びます。

「オマエのような愚かな人間には分からないでしょうが、この世界は、ただ広いだけではなく恐ろしく複雑な構造をしているのです！　いくら私が愛する者同士を繋げる力を持っていたとしても、そんな場所でどこにいるかも分からない精神体を呼び出すことがどれだけ大変か――って」
言いかけた後、私のとある言葉に気が付いたパルミアは、思い切り眉間に皺を寄せて私に詰め寄ってきました。
「今さりげなく私のことを呼び捨てにしましたね!?　様を付けて訂正なさい小娘！」
「あら、それは失礼いたしました。私達人間風情のためにわざわざ骨を折って下さり感謝の極みですわ、クソ女神様」
「この……！　口が減らない人間ですね！　クロノワの頼みでなければ今すぐにでも地上での恨みを晴らしてやりますのに……！」
吐き捨てるようにそう言った後、パルミアは私に背を向けます。
「集中するので二度と話しかけないでください。さっさと終わらせてクロノワのもとに帰りたいので」
「同意見ですわね。そうして頂けるとこちらとしても助かりますわ」
私の言葉に答えることなく黙り込んだパルミアは、全身から周囲の全方向に向けて、幾筋もの薄く透き通る赤いリボンを放ちます。
ここに来た時から何度も見たこの光景――どんなに距離が離れていようと愛する者同士を結びつけ、引き寄せるという愛の女神パルミアの権能、〝赤い糸〟。

これこそが、クロノワ様がわざわざパルミアを復活させてまで、協力を要請した理由でした。
この力さえあれば、クロノワ様でさえ大雑把にしか位置を特定できない、この宇宙に漂うジュリアス様の精神を呼び出すことができる。そして――
「――見つけました」
パルミアがつぶやくと、周囲の空間に漂っていたリボンが急激な勢いで私の左手に引き戻され、巻き付いていきます。
小指に何重にも巻き付いたリボンの先――私のわずか二メートル手前にはいつの間にか、リボンによって包み込むように手繰り寄せられた金色に光輝く人の大きさ程の精神体が浮かんでおりました。間違いありません。この光はまさしく――
「こんなところで引きこもって。らしくありませんわね――ジュリアス様」
リボンが解けると、私のつぶやきに反応するかのように、精神体がぼんやりと明滅します。
本人の意識があるのか、ただ声に反応しただけなのか。
とにかくこれで、ジュリアス様を現世に呼び戻す準備ができました。
「それで愛の女神様。この状態からどうやってジュリアス様を元に戻すのですか？」
一応女神様呼びをしてあげたからでしょうか。機嫌を直したパルミアは「よろしい」と偉そうに顎をしゃくると、発光しているジュリアス様の精神体を見て言いました。
「本来ならこのまま地上に連れ帰れば済む話でしたが、この有様ではまず無理でしょうね」
目を細めたパルミアは、状態を確かめるように指で精神体をなぞります。

「この人間の精神体は自我をほとんど失いかけています。こんな状態では少し動かしただけで消滅してしまうでしょう」
「ではどうすれば？」
「元の状態に戻すためには、この人間と深い魂の絆で繋がっているオマエ自身が消えかけている精神の中に入り、自我を呼び戻さなければなりません」
「魂の絆……？　困りましたわね。私とジュリアス様の間に、そのような強い絆が何かあったでしょうか」
「はあ？　今更何を言ってるの？　あるでしょう、オマエ達には。人間同士の魂をもっとも深く結びつける絆――そう、〝愛〟の絆が」
「愛、ですか」
なにやら先程から私とジュリアス様が相思相愛であることが前提として話が進んでおりますわね。ですが実際のところ、どうなのでしょう。
もちろん今更、私からジュリアス様への気持ちを否定するつもりはありません。
ジュリアス様からもすでにお気持ちは伝えて頂きました。
これは実質、相思相愛と言っても過言ではないのかもしれません。
「でも――」
私はまだ、ジュリアス様のお気持ちにハッキリと答えておりません。
その答えは加護を取り戻した後でという約束でしたもの。

それなのに、すでに私達が結ばれているかのように扱われるだなんて。
しかしそんなことを知る由もないパルミアは、腕を組み自慢げに続けました。
「仕方ありませんので、その手伝いまではやってあげます。感謝なさい？　この美と愛の女神であるパルミアの助力なしではそのようなこと、たとえ三大神であっても不可能だったのですからね！」
今ここで、それは違うかもしれないと異を唱えたとして。何の意味もないどころか、話が進まなくなるだけというのは分かっております。ただでさえ時間が差し迫っておりますし。
だからここはたとえ自分達の関係性に違和感を覚えていたとしても、パルミアの気分を損ねないように頷くほかないでしょう。
「ええ、感謝しておりますわ。よろしくお願いいたします」
「何ですか、突然素直になって。気味が悪いですね」
こちらを訝しげに見た後、パルミアは「まあいいです」と気を取り直して言いました。
「何かオマエ達二人の愛の絆を証明するような物はありますか？」
また反応に困るような質問を。
そんな物、未だにハッキリとした恋人関係でもない私達にあるはずが――
「……ありましたわ」
私の左手の薬指にはまった赤い魔鉱石（まこうせき）の指輪――ジュリアス様が消える前に、おそらくは私に渡そうと懐に忍ばせていた、これならば。
おそらくはパルミアが言う愛の絆の証明に、なり得るでしょう。

「婚約の指輪ですか。良いでしょう、それならば申し分ありません」
「そういうわけでは――」
……いえ、そういうわけだったのかもしれませんわね。
渡す前にジュリアス様は消えてしまったので、その意図は想像するしかありませんが。
「その指輪を精神体にかざしなさい。後は私が二人の精神を繋げます」
言われた通り、指輪を精神体のジュリアス様に掲げます。
すると、淡い輝きを放っていた精神体が徐々にその光を増していきます。
「――創造神の加護である〝英雄譚（ヒロイズム）〟が、なぜ自らが愛する者を守る時、無限の力を発揮するなどというふざけた条件なのか知っていますか？」
今にもジュリアス様の精神世界に入りこむかと思われた間際。
不意に、そんなパルミアの声が聞こえてきました。
「オリジンは人間が紡ぐ愛の物語が大好きなのですよ。地上の出来事に対して無関心なのを装いながら、創造主の手を介さずして生まれる人間達の恋バナが見たくて見たくてたまらないのです。まるで少女漫画のカップルに憧れる少女のように」
光で視界のほとんどが埋めつくされる中。
パルミアは憎たらしそうな顔でこちらを睨んで言いました。
「特にオマエとジュリアスのようなもどかしい二人の恋物語は、オリジンにとって大好物です。先程までの表情から察するに何やらうだうだと悩んでいたようですが、オマエ達は焦らずあるがまま

に愛を紡いでいけば良いのですよ。なにしろ最高神であるオリジンのお墨付きがあるのですからね。フンッ」

これにはさすがに驚きました。内心の葛藤を見抜かれていたこともそうですが、まさかこのクソ女神が私を気遣うようなことを言うなんて。腐っても愛の女神、ということかしら。

「貴女みたいな存在でも人を導くこともあるのですね。一応感謝しておきますわ」

「お黙りなさい小娘。それよりも仮にもオマエはこの私を退けたのだから、あんないけ好かない太陽神などに負けたら許しませんよ！」

そんな怒りの声を最後に。

私の意識は光に溶けて、すべてが白に埋め尽くされました。

◆　◆　◆

「……精神世界というにはあまりにもなじみのある光景ですわね」

目を開けた私の前に広がっていたのは、舞踏会の会場でした。

広いホールの床には赤い絨毯。天井にはいくつもの眩いばかりのシャンデリア。

周囲には燕尾服やドレス姿の貴族達が談笑を交わしております。そして――

「目線が妙に下がっていると思いましたが……これは一体どういった趣向なのでしょう」

自分の身体が子供になっていることに気が付きました。

しかもこのドレスは丁度私が社交界デビューを果たした、七歳の頃に着ていた物です。

ということは、ここは現実世界から十年程前の時間軸を舞台にした世界、ということかしら。

「それにしても――」

なぜここがジュリアス様の精神世界に選ばれたのでしょう。王子であるジュリアス様にとって、舞踏会は幼少期から嫌になるほど足を運んだ社交の場ではあると思いますが――

「……何はともあれジュリアス様を捜しましょうか」

ここはジュリアス様の精神世界ですし、ただの勘ではありますがおそらくはホールの中心。

人が一番集まっている辺りに、あのお方はいるのではないでしょうか。

そんな予想を立てながら、短い歩幅で周囲の貴族を避けつつ進んでいくと――

「――ジュリアス殿下！　我が娘をどうか婚約者に！」

向かっている方向、丁度ホールの中心辺りから殿方の声が聞こえてきました。

そこには大勢の貴族達と、彼らに囲まれた私と同い年程の少年の姿があります。

王族が着る豪奢な衣服を纏い、金髪に青い瞳をしたその少年――幼少期のジュリアス様は目を細めて薄い笑みを浮かべていました。

まあ、なんて子供らしくなく可愛げのない表情なのでしょう。

ええ、あのお顔には見覚えがあります。

あれはジュリアス様が愚か者を見て、心の底から楽しんでいる時の冷笑顔そのものですわ。

「子供の頃からあんな表情をしていただなんて、ジュリアス様は本当に生粋のひねくれ者です

わね」
私だってまだ七歳の頃は年頃の少女のように自然に笑っていましたのに。
しかし周囲の貴族達は、眼前の天使のような王子様がまさかそんなことを考えているとは露ほども知らず。まるでかがり火に群がる蛾のように、我先にとジュリアス様にまくしたてます。
「何を言う！　貴殿の娘はまだ五歳ではないか。それならば我が家の娘は七歳で丁度同い年、婚約するにはピッタリですぞ！」
「いやいや、我が家の娘は十歳で既に淑女としての教育も十二分に済ませております。将来の王妃候補としてこれ以上ふさわしい娘はおりませんぞ！」
あの貴族達……今まで散々私がブン殴ってきた、いかにもクズ貴族といった風体をしているので、ろくな方々ではないだろうとは思いましたが。どうやら彼らは、将来国王となるジュリアス様の婚約者に自分の娘を据えることで、権力を得ようと必死になっているようでした。
こういった社交の場において政略結婚の打診や駆け引きというのは、貴族社会においては見慣れた光景ではありますし、それ自体を否定するつもりはありません。ただ――
「――ジュリアス様」
お生憎様。そのお方にはもう、私という先約がおりますので。
「……？」
名前を呼ばれたジュリアス様が、キョトンとした不思議そうなお顔で私を見ます。
私は迷いない足取りでジュリアス様の前まで歩を進めて、まっすぐ彼の目を見ながら言いました。

「まったく、散々手間を掛けさせてくれましたわね。ほら、こんなところで遊んでいないで元の世界に帰りますわよ」
「元の世界……？　一体何を言っているのですか貴女は」
初対面かのようなこの反応、誠にしゃらくさいですわね。
それとも見た目通り、今のジュリアス様には七歳の頃の記憶しかないのでしょうか。
「共に来ればすべて分かります。さあ、行きましょう」
未だ要領を得ない様子のジュリアス様に手を伸ばします。
しかしそんな私を遮るように、周囲の貴族達が一斉に立ちふさがりました。
「我々を無視して殿下に話しかけるなど、なんと礼儀知らずの小娘か！」
「見ろこの生意気な面を！　一体どこの下級貴族の娘だ!?」
「クソガキめ！　上級貴族の我らが直々に教育してやる！」
彼らは口々にそう叫び私を取り囲むと、一斉に掴みかかってきます。
その表情は嗜虐と悪意に満ちていました。たとえ相手が幼い子供であろうと、危害を加えることにいささかの躊躇もないといわんばかりに。
「まあ怖い。まだ七歳のいたいけで可憐な少女である私に対して、なんて非道な振る舞いなのでしょう」
ですがこれは好都合かもしれません。なぜなら――
「私も貴方達のようなクズが相手ならば――」

貴族達の手が私に触れる間際、床を蹴って上に向かって飛び上がります。
彼らを頭上から見下ろす私は、落下しながら両拳を腰だめに構えました。
「――ブッ飛ばすことに微塵の躊躇もありませんわ」
土砂降りのように苛烈に、頭上から両拳の連打をクズ貴族達に叩きつけます。
「ぐえッ!?」
「げろォッ!?」
カエルのようなうめき声をあげて、貴族達が次々に床にめり込みます。
ピクピクと痙攣する彼らの背の上に、私はふわりと着地。スカートの裾をつまんで一礼します。
「さて、まだ私に文句がおありの方はいらっしゃいますか？」
「～～～っ！」
床に抑え込まれて、無様に這いつくばる私の姿でも思い描いていたのでしょう。
遠巻きからニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべていた貴族達は、想像とはまったく正反対になった今の光景を見て、顔を引きつらせていました。
「かかってこないのならば、お先に失礼いたします」
周囲を一瞥してからジュリアス様に再び向き合います。
顔に飛び散った返り血をドレスの袖で拭いながら、私は手を差し出します。
「邪魔者は黙らせました。さあジュリアス様、私と――」
「――ぶふっ！」



私の言葉をさえぎるように、ジュリアス様が突然吹き出しました。
「ははははっ！　我慢するつもりだったが、これは無理だ！　さすがに堪えきれん！」
お腹を抱えて心底おかしそうに笑うジュリアス様に、思わず眉をひそめます。
この口調。それに先程までの少年らしい無邪気さが剥ぎ取られたかのような笑い方。
もしやこのお方――
「ジュリアス様……貴方、本当は記憶がありますわね……？」
半目で睨みつけるとジュリアス様は口元を押さえて、にやける口元を隠しながら言いました。
「いや、まさかこんなところにまで貴女が乗り込んで来るとは思っていなくてな。最初は本当に驚いたぞ」
「最初はということは、途中からはわざと知らないフリをしていましたね？」
「ああ。その方が面白い反応が見られると思ったからな。そして予想通り、貴女がクズ共を地面に埋める様を久しぶりに見られたというわけだ」
本当にこの腹黒王子はまったく。今がこんな状況でなければ一発ブン殴ってやるところです。
「言いたいことは山ほどありますが、今は――」
「ここから出ることが先決だな。そしてその手段はもう確保してあるのだろう？」
人のセリフを取らないで下さいますか？
その上、知ったような口で先回りして。本当に腹立たしいお方。でも――
「私の手を取って下さい」

……私は変です。だってそんないけ好かないところも――なぜだか無性に愛おしく感じてしまうのですから。
「こうか」
幼いジュリアス様の指が、私の指に絡むように手を繋ぎます。
私は目を閉じると、事前にクロノワ様とパルミアに言われていた通り。
ジュリアス様を救い出した後、地上に戻るための時の神と愛の女神二人の力を借りた一度限りの術式――〝次元転移〟を発動させます。
「――愛の光よ。時の楔（くさび）を断ち切り次元を超えて、魂の絆で結ばれし二人をあるべき場所に還せ」
直後、私達の握り合った手から桃色の光が溢れ出します。
それと同時に、身の丈を超える巨大な歯車が周囲の空間に大量に浮かび上がりました。
歯車はひとりでにガチガチガチリと、逆回転で回りだし。その動きに比例するように、桃色の光は会場全体に広がっていきます。
「――スカーレット」
やがて光が空間すべてを包み込もうとしたその間際。
ジュリアス様が間近で私を見つめながら、優し気に目を細めて微笑みます。
「私を呼び戻してくれてありがとう。もう二度と、貴女と離れはしない」
思いもよらないまっすぐなその言葉に、私は――
「……こちらのセリフですわ、バカ」

顔を背けてぽつりとそうつぶやきました。
赤く火照った顔を、目の前の愛しい人に見られないように。
「〝次元転移〟発動――！」
かくして私の視界と意識は、桃色の光に飲み込まれました。

第二章　さようなら、しつこいお肉さん

まどろみの中、遠くから微かに音が聞こえてきました。それは風で青葉が揺れるさざめき。鳥達が朝を知らせるさえずり。そんな自然が奏でる環境音を目覚ましに、私は瞼を開きます。
「自然の匂いが濃い……ここは森の中？」
窓から差し込む朝日に照らし出される、木造りの天井に壁。
六メートル四方ほどの屋内には、同じく木で作られた様々な家具が置かれています。
部屋の壁際にはハンモックが吊り下げられていて、私はその内の一つで目を覚ましました。
「自然があるということは、無事地上に戻れたようですわね」
身を起こすと青いマントがずり落ちます。
これは……ジュリアス様が普段纏われている羽織物ですわ。
「ジュリアス様……？」

問いかけても無人の部屋から返事はありません。
マントがあるということは、この近くにはいらっしゃるのでしょうが。
「それはそうと、ジュリアス様の物もそうですが、なぜ私のドレスがここに……？」
魔大陸の戦いから私はずっと、魔道具である漆黒のドレスを着ていました。
しかし今着ているのは、普段着ているお気に入りの赤いドレス。
ジュリアス様も加護の代償で消える直前には、普段の白ではなく黒い衣服を着ていたはずなので、この青いマントがここにあるはずがありません。
「これは一体どういう状況かしら……あら？」
その時、不意に何者かの視線を感じた私は窓の方に目を向けます。
するとそこには――
「……じー」
ふわふわの黒い毛並みをしたわんこが横並びに三匹。大きな琥珀色の目を興味深げに輝かせながら、じぃっと私の方を見ていました。そう、ナナカそっくりのわんこ達が。
「もしや獣人族の方々ですか……？」
問いかけると、わんこ達はスッと窓から姿を消します。
直後、小屋の外に向かってその子達と思われる、子供の大きな声が響きました。
「ジュリアス兄ちゃーん！　スカーレット姉ちゃんが起きたー！」
それから数十秒後。

「遅いお目覚めだったな、スカーレット」
小屋のドアが開くとそこから白い正装を着たジュリアス様と、窓から私を見ていた三匹のわんこ、もとい獣人族の子供達が入ってきました。
「ごきげんよう、ジュリアス様。とりあえず今の状況を説明していただきたいのですが、その前に――」
興味津々に私の足元まで駆け寄って来るわんこ達に、手の平を差し出します。
「お手」
「わふ！」

◆　◆　◆

高い木々に囲まれ、緑が生い茂る森の中。朝の木漏れ日を浴びながら、私とジュリアス様は三人の獣人族の子供達に案内されて、村の中を歩いていました。当初はここに飛ばされてから何があったのか、ジュリアス様に教えていただこうと思ったのですが――
『私も貴女より三十分程早く目を覚ましたに過ぎん。現状に関してはこれから村長に聞きに行こうと思っていたところだ』
だそうで。
未だ私達は魔大陸の戦いからどれだけの時が経ったのか、仲間の皆様がどうなったのか、あれからこの大陸がどうなったのかも何も知らずにいたのでした。
仲間の皆様に関しては、私が誰よりも信頼しているレオお兄様が一緒にいらっしゃいますし、命に関わるようなことはないと思いますが。
「――それで、私達が精神世界から地上に飛ばされた先が、偶然ナナカの生まれ故郷のこの村だったと？」
「ああ」
パリスタン王国の北方。大森林地帯に存在する南部ファルコニアの獣人族の村。
確かに以前ナナカから聞いていた、彼の生まれ故郷の場所と一致します。
「出来過ぎた話ですわね」
周囲にはぽつぽつと小屋が点在し、窓からは獣化した状態のもふもふわんこな方々が、じーっとこちらを見ておりました。かわいらしいですわね。実に微笑ましい光景です。
「同意見だ。私にもこれが偶然だとは思えん」
隣を歩くジュリアス様が、思案するように顎先に指を当てます。
「精神世界から飛ばされる直前、脳内に創造神の声が聞こえた」
「オリジン様はなんと？」
「〝尊みが深い〟だそうだ」
「……は？」
まったく意味がわかりません。

眉をひそめる私に、ジュリアス様が肩をすくめました。
「続いて〝良きものを見せてもらった礼に、少しだけサービスをしてやろう〟とも聞こえた」
……調停者には意外と饒舌なのですね、オリジン様は。
「サービス……私達の服やこの村に飛ばしてもらったこともその一環だと？」
「服に関してはそうだろうな」
私達の黒衣はすでに破損が著しく、使い物にならなくなっていましたものね。せっかくダンテさんから頂いた貴重な魔道具だったのですが……無事でいらっしゃるかしら、ダンテさん。
「だが飛ばす場所に関して言えば、パリスタン王国内の方が我々にとっては都合が良かった」
それはその通りですわね。パリスタンと比較的近いとはいえ、土地勘がないこの場所に飛ばされてかなり困惑しておりますし。
リンドブルグやエルドランドといった場所に飛ばされるよりは、遥かにマシではあるので、あまり贅沢を言える立場ではありませんが。
「それをあえてここに飛ばしたということは、創造神の気まぐれでなければなにかしらの意味があるのだろうよ」
「それが私達にとって利のあることであれば良いのですが。それにしても――」
手を額に当ててひさしを作り、頭上を見上げます。
木漏れ日の眩しさはまばゆすぎる程で、まるで太陽がいつもより近くにあるように感じました。
太陽神オル・ソレイユ……この日差しの強さも、この世界が今あの方の影響を強く受けているせいでしょうか。
そんなことを考えながら歩いていると、前を行く子供達がこちらに振り返って言いました。
「あっちが村長の家ー！」
「お姉ちゃん達、色々お話聞きたいんでしょー？」
「僕達はこの村の周りからほとんど出ないから外のことはよく分からないけど、じぃじは物知りだからきっと教えてくれるよー！」
ふふ。思わず笑みがこぼれてしまいます。本当に、なんといい子達なのでしょう。
ナナカから獣人族は他種族に対して警戒心が強いというお話を聞いておりましたが、この子達は随分と人懐こいですわね。
「ありがとうございます。でもどうして皆様は、私達にそれほど良くしてくださるのですか？」
「私も疑問に思っていた。ただの好奇心にしては親切が過ぎるからな」
「ジュリアス様？　言い方に遠慮が無さ過ぎませんか？」
デリカシーゼロのジュリアス様を睨んでいると、子供達の一人が笑顔で言いました。
「ナナカ兄ちゃんから前に手紙をもらってたから！　スカーレット姉ちゃんとジュリアス兄ちゃんは、奴隷にされていた同族を救ってくれたんだって！」
そういうことでしたか。さすがは私の従者です。細かなところにも配慮が行き届いておりますわね。
「それにしてもよく一度も会ったことがない私達を、本人だと信じてくれましたわね」

「確かにな。手紙で聞いただけの見た目の特徴だけでは、信憑性に欠けると思うが」
首を傾げる私とジュリアス様に、子供達は「ふふーん！」と自慢げな顔で言いました。
「分かるよ！　銀髪で赤いドレスが似合うとっても美人なお姉ちゃんと、金髪で無駄に自信満々な王子様でしょ？　そのまんまだもん！」
「ふふ。確かにそのままですわ。ね、金髪で無駄に自信満々な王子様？」
「無駄に自信満々ではなく、実力に裏付けされた自信満々だがな」
実際、そこまで特徴が一致すれば、初見であっても間違いようもないですわね。
まさかオリジン様は、そこまで見越して私達をこの服装にしたのでしょうか。
「ところで最近ナナカから手紙は届きましたか？」
「うーん。それがね、ここ最近はめっきり手紙が――」
子供の一人が言いかけた直後。
遠くからズゥン！　と、木が倒れるような音が聞こえてきました。
そしてそれに続くように、どこからか大人の叫び声が響いてきます。
「奴隷商の獣人狩りだ！　みんな逃げろ！」
その声を皮切りに、獣人族の方々が慌てたように一斉に小屋から飛び出してきました。
彼らは村の外へと四方八方に逃げ出していきます。
奴隷商――パリスタンでは完全に撲滅しましたが、ここにはまだそのような愚かな行いをするクズ共が蔓延っているのですね。

「クゥーン……」
私達を案内していた子供達が、泣きそうな表情でその場で震えています。
かわいそうに。こんなに怯えて。私はしゃがみ込み、彼らを優しく抱き締めました。
「大丈夫。皆様は隠れていてください。悪者はすぐに私が片付けてまいりますので」
優しく微笑みかけてから立ち上がります。
「さて、地上に戻ったリハビリがてら、クズ共を大陸の彼方までブッ飛ばしてスカッとさせていただきましょうか」
拳を握り込み、音のした方へと駆け出そうとします。
そこへジュリアス様から「待て、スカーレット」と声がかかりました。
「忘れ物だぞ」
「これは……！」
投げ渡されたのは私愛用の鋲付き手袋でした。
魔大陸での決戦時にどこかに紛失してしまい、そのことをずっと悔やんでいたのですが――
「これもオリジン様のサービスですか？」
「ああ。どうやら創造の神も私と同じく、貴女がクズ共をそれで思い切りブン殴る姿をご所望のようだ」
まったく、仕方のない方々ですわね。
「言われずともブン殴りはしますが、あくまでそれは世のため人のため――いいえ」

手袋を装着。ああ、やはりこれが一番私の手に馴染みますわね。
「世界中で虐げられている善なる人々のため。私はこの拳を振るうのみです」
私の言葉にジュリアス様は満足そうに頷きます。
「私はここで獣人族の者達を守りながら、高みの見物をさせてもらおう。ああ、そうそう一応言っておくが、くれぐれも奴隷商達を再起不能にはしないように」
「分かっております。私達がいない間にこの世界で何が起こったのかを聞かなければいけませんから」
「分かっているならば良い。さあ行け――我が愛しの撲殺姫よ」
その言葉が終わるや否や、私は地を蹴り森の中へと駆け出しました。
「――てこずらせるんじゃねえ！　犬畜生が！」
「ギャウッ!?」
丁度音がした辺りを駆けていた時でしょうか。男の怒号と獣人族の方の悲鳴が聞こえてきて、私はその場で足を止めました。声の方向に視線を向けると、そこにはボロ衣を纏った十人程の男達。
そしてその足元で倒れている、獣人族と思われる大きな獣の姿がありました。
「ようやく一匹か。すばしっこい奴らめ。オラ！」
「ギャンッ!?」
「おい、痛めつけるな。商品価値が下がるだろ」
「人間様に歯向かってくるこいつが悪いんだよ。これから奴隷として売られてこき使われるだけの

犬畜生が――」
その言葉が終わるよりも前に、私の足はすでに地面を離れていました。
一秒でも早く、目の前のクズ共をブチのめすために。
「――〝加速三倍（アクセラレーションスリーバースト）〟」
瞬時に彼らの目前まで到達した私は、獣人族の方を足蹴にしていたクズに向かって、地面からすくい上げるように拳を突き上げます。
「あぱアアア!?」
ボゴォ！　という轟音と共に、クズは凄まじい勢いで斜め上方の空に吹っ飛びました。そのあまりの勢いに、彼らは自分達の身に何が起こっているのかが理解できなかったのでしょう。今まで会話していた仲間が一瞬にして星になったクズ共は、呆けた顔でポカンと大きく口をあけました。
「は？　今何が――」
言葉を紡ぐことすら許さず、下から上に向かって左足を思い切り蹴り上げます。
「ポゥッ!?」
素っ頓狂（すっとんきょう）な悲鳴をあげながら、蹴り飛ばされたクズが先程星になった方と同じ軌道を描いて空に消えていきました。
そこでようやく彼らは私の存在に気が付いたのでしょう。
驚きの顔でこちらを見て、慌てて後退ります。
「ぎ、銀髪に赤いドレス!?　貴様もしや――」

立ち読みサンプルはここまで